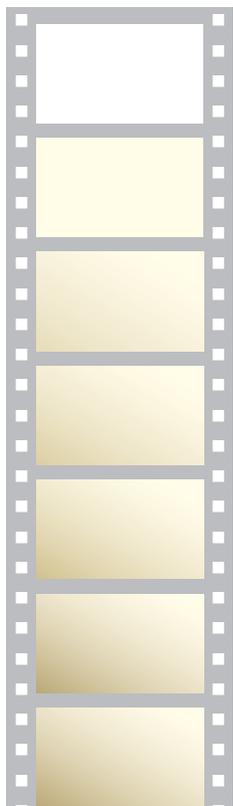
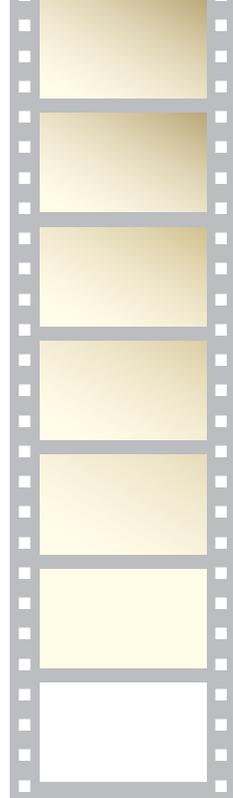


伸^{ノブ}さんのシネマトーク

鈴木 伸夫



第四十六回 「スクリーンのDJたち」③

スクリーンに登場したDJたちを思い出すまま、ご紹介してきましたが、今回、洋画2本、邦画2本でとりあえず終了とします。DJがスクリーンに出て来るご存じの映画があれば、教えて下さい。

今回は洋画からご紹介しましょう。

84年、アメリカ・コロラド州・デンバーで実際に起きた「ラジオDJ・アラン・バーグ殺人事件」のノンフィクションを書いたステイブ・シンギュラーの著書が気に入り、俳優のエリック・ボゴシアンとタッド・サヴィナーが戯曲化して上演、その舞台劇の映画化です。「トーク・レディオ」（88年製作・アメリカ映画、監督オリバー・ストーン、出演エリック・ボゴシアン、アレック・ボールドウィンほか。音楽スチュワート・コーブランド）

主演のエリック・ボゴシアンは、オリバー・ストーン監督とともに映画の脚本も担当し、第39回ベルリン国際映画祭銀熊賞を受賞しました。

映画の舞台は、テキサス州ダラス。そこで深夜、ラジオ番組「ナイト・トーク」（生放送による聴取者参加番組）の人気DJ、バリー（エリック・ボゴシアン）は、毎晩、聴取者の悩みを聴き、歯にきぬ着せぬ対応ぶりに、ローカルだけでなく全国放送の声も周りから上がっていました。

実際、映画で放送トークのやりとりを聴いていると、お互いに言い争ってストレス解消をしている品格のない「テレフォン人生相談」のようでした。

ストレス解消でも、ある一線を越えると、映画のラストは悲劇を迎えるのです。DJバリーは、彼の番組のリスナー（聴取者）に射殺されたのです……。

次は、黒人DJの映画です。

「バニシング・ポイント」（71年製作・アメリカ映画、監督リチャード・C・サラフィアン、出演バリー・ニューマン、クリーヴオン・リトル、音楽監修ジミー・ボーエン）とは「消滅点」という意味です。

陸送屋のコワルスキー（バリー・ニューマン）は、コロラド州デンバーからカリフォルニア州サンフランシスコまで、車の陸送を頼まれます。映画は、その間の30あいだ

数時間で彼の経歴を語り、70年代のアメリカを描きます。そして、スピード違反で警察に追われ包囲されるのを、KOWラジオの放送で助けるのが、盲目の黒人DJ「スーパー・ソウル」(クリーヴォン・リトル)です。金曜日午後11時30分デンバーを出て、カリフォルニア日曜日午前10時2分、コワルスキーの車は何台ものトラックターで作ったバリケードの「バニシング・ポイント」へ突っ込んでいくのでした。最後には、むなしい気持ちで胸がいつぱいになる映画でした。なお、黒人DJ「スーパー・ソウル」は実在しません。創作上の人物です。

続いて、邦画2本をご紹介します。

「チーちゃんごめんね」(84年製作・日本映画、監督西河克己、出演秋吉久美子、勝野洋ほか。音楽甲斐正人)

60年代から70年代にかけて、東京のラジオ局「文化放送」の、人気DJとして活躍した成田敦子は、「走れ歌謡曲」などのリスナーから「ひょうたんなまず」と呼ばれ人気を集めていました。

しかし、75年、33才の若さで亡くなったのです。この映画は、彼女の遺稿集をも

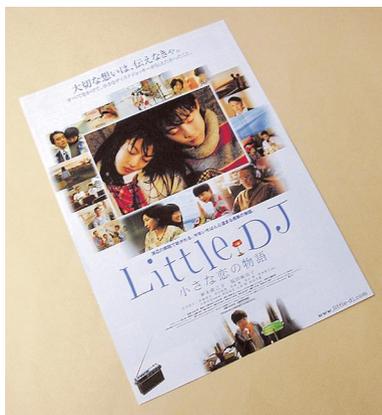
とに作られた実話です。

成田あつ子はサラリーマンの夫、一人娘の「チーちゃん」こと知菜子と、姑の四大家族で暮らしていましたが、ある日、あつ子が「乳ガン」と診断され、手術を受けたのです。手術は成功しますが、彼女は、仕事を続けるか、このままチーちゃんのおそばにいるべきか、悩むのでした……。

「チーちゃんごめんね」のタイトルの前には、「こんなに早く死んでしまつて」という言葉が隠されているようです。

「Little・DJ 小さな恋の物語」(06年製作・日本映画、監督永田琴、出演神木隆之介、福田麻由子ほか。音楽佐藤直紀)は、鬼塚忠のベストセラー小説の映画化です。

野球とラジオのDJが大好きな少年「太郎」は、ある日学校で倒れ、海辺の病院に入院します。やがて太郎は、お昼の院内放送のDJを任せられます。患者たちとの交流で「たまき」という少女と出会い、小さな恋が芽生えるのでした。この映画は、70年代の名曲でつづる日本版「小さな恋のメロディ」(オリジナルは、70年製作・



▲上映当時に配られていた
「Little DJ 小さな恋の物語」のチラシ

イギリス映画、監督ワリス・フセイン、出演マーク・レスター、トレーシー・ハイド、ジャック・ワイルドほか)です。

洋の東西を問わず、いろいろなスタイルのDJがいることがよくわかりました。あなたはどんなスタイルのDJがお好みですか？ ぼくは、早口でベラベラ話すDJよりも「オーソドックスでじっくりと聴かせ、聴取者にもう一度聴きたいと思ってもらえるDJになりたかった」と、いま振り返って思うのです。

〈了〉

(文中敬称略)

伸

平成24年7月